

国立国会図書館国際子ども図書館シンポジウム  
絵本の黄金時代 1920～1930 年代：アメリカとソビエトを中心に

## 1920 年代のソビエト絵本美術

平成 22 年 11 月 27 日

講師：ヴェレナ・ラシュマン

### はじめに

初めに、島先生、そして国際子ども図書館が私をお招きくださいましたことに心から御礼申し上げます。皆様に 1920 年代のソビエト絵本美術を御紹介できることを大変うれしく思います。

ソビエト連邦の最初の 10 年、1923 年から 33 年に、一部の作家や画家が未就学児を対象に絵本を製作しました。それは文学的、芸術的観点から見ても非常に素晴らしく、古典となりました。ただスターリンの政治はこの芸術的児童文学の発展を阻み、この時代の絵本は長い間、一般市民の関心から外れてしまいました。

これらの絵本に関する最初の研究は、第二次世界大戦後、ロシア絵本の歴史の専門家エラ・ガンキナ (Ella Gankina) によって行われました。1963 年、彼女は論文を発表しました。彼女の 1920 年代の絵本に関する研究は、いまだに最も包括的で深いものと言われています。そして、私の本日のプレゼンテーションは彼女の研究に多く基づいています。

### 政治・社会状況

まず簡単に時代背景を御説明したいと思います。政治・社会状況、それから胎動期、子どもの文学、絵本美術、絵本のテーマという

形で進めさせていただきます。

まず政治・社会状況です。当時、最も有名な芸術家だったエル・リシツキー (El Lisitskii) を引用します。彼の作品 *Pro dva kvadrata* (6 つの構成による 2 つの正方形についてのシュプレマティズムのお話) (Skify, 1922) は、国際子ども図書館ホームページの「絵本ギャラリー」の「モダニズムの絵本 日常の中の芸術」で、実際に見ることができます。

1920 年、彼はこう書きました。

#### (スライド)

今現在我々珍しい時代に生きている新しい無限の創造性この世の現実のものとなり我々のうちにある想像力が我々の意識に広がる。

以上、引用です。実はこの文章には句読点がなく、この中で私たちは彼の息切れ感、無限の可能性、そして、その当時の緊張感を感じ取ることができます。1920 年代の絵本の中には、このような感覚が非常に明確に反映されています。もちろん中にはもう少し穏やかな形もありますが、この時代の絵本は同時代の芸術論、政治論に基づいており、絵本自体がその一部であると考えていました。また、

革命後のロシアの児童文学は教育的な道具として作られるようになりました。そして、国を社会的、経済的に近代化するための支えとなりました。これは 18 世紀頃の西ヨーロッパの児童文学の場合と全く同じです。

例えば、フランス革命を頂点とするような欧州各国の革命と同様です。1914 年の戦争、1917 年の十月革命、そして 1921 年まで続いた内戦の後、旧ロシアの社会的構造は崩壊し、経済は衰退しました。国家の再建は初期のソビエト連邦の最初の任務となりました。先進国に追いつくことが目的となり、近代的な裕福な社会の基盤である高度な技術を開発することが目的となりました。そして、大きな期待が子どもたちに向けられました。彼らこそが未来を請け負うからです。そのため、未来の市民のための教育というのが国家の最大の優先課題となり、こういう形で教育的な材料として、児童文学がソビエト連邦の早期に発展していきました。

## 胎動期

もちろん、新しい児童文学はどこからともなく現れたわけではありません。これは 19 世紀の最後の方、1880 年代、90 年代に、すでに教育的、技術的な概念として存在し、それに基づいています。

児童心理が新しい興味として、ここで掲げられるようになりました。その当時、最も影響力の高かった本は、エレン・ケイ (Ellen Key) の *The Century of the Child* (子どもの世紀) で、1905 年にはすでにロシア語に翻訳されていました。

アールヌーヴォー、ユーゲントシュティル、これが絵本芸術の発展のもう一つの土台と

なっています。すでに 19 世紀には確立されていて、絵本の一つの成果を生み出しました。これは総合美術という概念を絵本にもたらしめました。アールヌーヴォーのロシア版を代表する“芸術世界” *Mir Iskusstva* は、テキストと絵とタイポグラフィーを統合しました。

それから、イワン・ビリービン (Ivan Bilibin)、ゲオルギー・ナルブト (Georgii Narbut)、そしてドミトリー・ミトロフキン (Dmitrii Mitrokhin) も独自に絵本を作りました。彼らはフランスとドイツからインスピレーションを受けています。

## (スライド)

ビリービンの一つの例です。アレクサンドル・プーシキン (Aleksandr Pushkin) のおとぎ話、*Skazka o tsarie Saltanie* (サルタン王の物語：プーシキンの昔話集) (Izd. Ekspenditsii zagotovleniia gos. Bumag, 1905) です。この本は展示会で御覧になっているかもしれませんが、葛飾北斎の浮世絵を引用しており、ロシアの民話的なモチーフと組み合わせ、少しアンティークのタイポグラフィーのように見えます。

アールヌーヴォーは絵本の発展に大きく貢献しました。ただ、1920 年代の絵本は前衛芸術、つまり未来派と構成主義に、より大きく依存していました。特に前衛芸術がネオプリミティヴィズム (民衆芸術) に寄せた関心が児童文学に大きく貢献しました。ビジュアルアートが子どもの絵に新しい関心を注ぐようになり、一方、文学は民話や子どもが書いたものに注目するようになりました。

新しい児童文学の形式と内容は、社会の近代化、現代化を反映していました。そして、Northern Lights（北極光）と呼ばれている子ども向けの雑誌が発行されるようになりました。この雑誌で、マクシム・ゴリキー（Maksim Gorkij）はこのように言っています。

（スライド）

この雑誌の目的は、子どもたちの中に、能動的な行動への意識を育てることである。理性の力、探究、芸術の大きな課題——人間を強く美しくするこれらのものに対する関心や敬意を子どもたちの中に育てるのである。ゆえに、私たちの目が理性、素晴らしいアイデア、偉大な功績の場所である街に向けられるのは明らかである。街では人々は鍛冶屋の炉の中の石炭のように光り、過去の暗い鉱石は溶け出していまい、新しい命に形作られ、勇気を持って未来を見ることができるのである。

近代の必要不可欠な特徴がここで見られます。過去の拒絶、それから合理性への信頼、技術、経済的進歩への信頼、そして居住地としての街への信頼ということ、児童文学は人々が強く、美しくなることに役立ち、より良い近代的な社会を作ることに貢献します。

「未来」を描いた子どもの絵本

こうした形で社会的、芸術的、教育的な意図が絵本に移ってきました。

（スライド）

これは *Vchera i segodnia*（昨日と今日）

（Raduga, 1925）という作品で、1925年に書かれました。サムイル・マルシャーク（Samuil Marshak）とウラジーミル・レーベジェフ（Vladimir Lebedev）は、作家、芸術家としてだけではなく、彼らは編集者としても重要です。その当時の全ての絵本のように、これも薄い12ページの冊子です。1ページ目に将来への信頼を描き、暗い過去と未来にある楽観的なビジョンとが、非常に大きな対照となっています。

（スライド）

これが『昨日と今日』の表紙です。これは「絵本ギャラリー」の「モダニズムの絵本 日常の中の芸術」で御覧いただけます。

テキストと絵本は、対比を続けます。マルシャークとレーベジェフは日常のものを使って、こうした変化を目に見えるような形にしました。

『昨日と今日』は、1920年代の絵本の典型的な性質を表す事例です。作家と画家の緊密な協働の結果を表しています。この表紙には実は両方の名前が書いてあり、文字の大きさも同じで、誰が作家で誰が画家であるかが分かりません。このテキストと絵は、分けることができない一体として融合されていて、そして、*Knizka-kartinka*（カニシカ・カティンカ）——*knizka*（カニシカ）は本、*kartinka*（カティンカ）は絵です——という芸術的な構造を作り出しています。つまり、絵本というのは単なる絵が付いた物語ではなくて、コミックのように絵とテキストを合わせてメッセージを伝えるもので、それぞれが重要であるということです。そして中身と形式は互いに織り交じわり、そして具体的な情報をも

って子どもたちに純粋な鼓動を与えるのです。

レニングラードでは、マルシャークとレーベジェフが児童文学の新しい宇宙を作り出しました。ここでは作家と画家が共同作業を行いました。彼らの協働によって、Raduga (ラドゥガ) という新しい出版会社が立ち上がりました。1923年から1930年の間、ジャーナリストであるL.R.クリチャコ (L.R.Kljačko) は400冊以上の絵本を出版しました。多くのものが、例えば、チュコフスキーの絵本のよう古典です。『昨日と今日』は、1925年に初めてその会社で出版されました。マルシャークとレーベジェフの協働は、レニングラードに、1925年、国立出版所の児童書部門を創設することによって、ますますその重要性が高まりました。マルシャークはリーダーシップを取り、レーベジェフを美術編集者として選びました。彼らは一緒になって「レニングラード派」という傑出した作家と芸術家のネットワークを作り出したのです。

## 出版社の文学作品

マルシャーク以外でレニングラードの国立出版所で最も重要な作家は、コルネイ・チュコフスキー (Kornei Chukovskii) です。マルシャークは英文学に対する情熱をチュコフスキーと共有していました。彼らは多くの本を英語から翻訳し、チュコフスキーは、例えば『ドリトル先生』をロシア語に翻訳しました。チュコフスキーとマルシャークは、児童文学の使命と美学について似たような見解を持っていました。

1928年に初めて出版された *Ot dvukh do piati* (2歳から5歳まで) の中で、傑出した文芸理論家でもあり優れた作家でもあった

チュコフスキーは、子どもの情緒的、精神的な発展のためには想像力と空想が必要不可欠であると言っています。そして、言語の習得の一つとして、リズムが重要であると、チュコフスキーは明確に理解していました。そして、マルシャークとチュコフスキーは、現代の形式主義理論の中に、文学と言語学の関心を織り込みました。形式主義者の言語学者と作家は、繰り返しや頭韻法、言葉遊びのある子どもの言葉と民俗的な詩に非常に詩的価値があることを認識していました。

マルシャークは、ダニール・ハルムス (Daniil Kharms)、アレクサンドル・ヴヴェージェンスキー (Aleksandr Vvedenskij) といった前衛主義的な詩人に、子どものための文章を書くよう奨励しました。彼らは意味や感覚を超えるような、言葉ではなくて音に興味を持つような作家で、意味の限界に挑戦しました。

### (スライド)

この *Million* (百万) (OGIZ Molodaia gvardiia, 1931) には、コナシェーヴィチが挿絵を描いています。40人の男の子と女の子が交差点に向かってそれぞれ行進しています。そして、スタッカーで4、40、4×4といった数字を繰り返しています。ここでは、詩を形成しているのは言葉の音です。ですから中身には意味がありません。この音を私がちょっと読んでみます。ロシア語です。

### (朗読)

ここで重要なのは、言葉が発する音です。マルシャークやチュコフスキー自身の作品では、逆さま言葉や言葉遊びが重要な要素でし

た。しかし、二人とも、現実への明確な関係性を持つことが必要であると言っています。現実と比較することによってのみ、このような逆さま言葉が機能し、これによって感覚を研ぎ澄ますことができ、子どもが世界を自分のものにしていくことができます。二人は、おとぎ話の語り的手法を使って、子どもたちに良い行動を教えました。

(スライド)

マルシャークの *Knížka pro knížki* (本についての本) (Raduga, 1925) という作品の中で、ある男の子は非常にだらしがなく散らかしっぱなしですが、ある日、本がその男の子に反撃します。

(スライド)

チュコフスキーの *Moidodyr* (よくよく洗え) (Raduga, 1923) という話では、汚い男の子が体を洗うことを拒絶するので罰を与えます。実は子どもにとっては、このように汚い男の子というのは、最後のきれいな男の子よりも興味が持てます。

## 芸術的表現

イラストレーションの中では現代世界の魅惑が特に目に見えるようになります。1920年代において、自身の絵本及び編集した作品によって最も影響力のあった芸術家は、ウラジーミル・レーベジェフです。

(スライド)

彼は「レニングラード派」と呼ばれた、実験的なグラフィックスと絵画を特徴とするイラストレーターを世に紹介しました。ウラジ

ーミル・レーベジェフ自身、ウラジーミル・コナシェーヴィチ、アレクセイ・パホーモフ (Alekssei Pakhomov)、バレンチン・クルドフ (Valentin Kurdov) などの芸術家たちが、優れた作家と共に、新しい媒体、絵本を作りました。そのインスピレーションと技法は映画、ポスター、構成主義、未来派、及び美術具象主義の絵画といった、あらゆる現代メディアと分野から得ました。これが幾つかの例です。

(スライド)

文章の無い絵本、*Ochota* (狩り) (Raduga, 1925) の中で、レーベジェフはまた違う形のプリミティヴアートを取り入れています。もの、動物、狩人などが基本的な形となっているのです。その形を見ると洞窟壁画が思い浮びますが、画面が古代文化的であっても、表現しようとしていることは現代であることは明らかです。

(スライド)

こちらは四つの絵本の表紙を示しています。レーベジェフとマルシャークの絵本です。*TSirk* (サーカス) (Raduga, 1925)、*Moroženoe* (アイスクリーム) (Raduga, 1925)、『昨日と今日』、そして *Bagazh* (荷物) (Raduga, 1926) です。『昨日と今日』は既にお見せしました。レーベジェフは、「ロスタの窓」というロシア電信局の風刺的プロダガンバポスターの製作経験を利用しています。

(スライド)

これはレーベジェフが描いた数多くのロシア電信局のポスターの一つです。これは 1921

年の内戦中のポスターです。銃を側に置いて仕事をしないとイケない、というスローガンが掲げられています。

(スライド)

『サーカス』のどのページも、何らかの宣伝をしている、あるいは短いストーリーを語っているミニチュアポスターのようです。

(スライド)

『アイスクリーム』は、お金持ちの男性がアイスクリームを食べ過ぎて冰山となってしまい、夏には子どもたちのトボガンやリュージュの遊び場になってしまうという物語です。ここでも装飾的な要素は全くありません。描かれている絵一つ一つが独立しており、白い地に明るい色使いの、平らな単純な形に抑えられています。

これらの本は、エル・リシツキーが主張した新しい時代の本を代表するもので、各ページがポスターのようにメッセージを大きな声で楽しく宣伝しています。このメッセージは、家族という近い関係に向けているものではなく、より広範囲の、道や市場といった、一般の社会に向けられています。

レーベジェフは確かに絵本出版の権威でしたが、自分の芸術的趣向を他のイラストレーターに強要することは全くありませんでした。

ウラジーミル・コナシェーヴィチは、レニングラードの出版社において、レーベジェフを除いて最も重要なイラストレーターでした。彼は自分の芸術活動を「芸術世界」(ロシア版のオールヌーヴォー)の仲間と始めており、オールヌーヴォーの影響を受けました。1923

年にはすでに古典文学のイラストレーターとして、よく名が知られていました。

(スライド)

そして 1926 年の彼の作品、*Naša ulica* (我々の道) (Gosudarstvennoe izd., 1926) は近代的な都市の生活を描いていますが、レーベジェフのポスター的な表現や言葉ではありません。コナシェーヴィチは、もっと親密な、親近感を与える絵を描いており、舞台装置のようです。我々は直接に語りかけられるのではなく、これらの絵を外から見るのです。ここでは映画のエピソードのような絵があります。ここでは、線が強調されています。そして、この渦巻状のような図柄はコナシェーヴィチの芸術の起源である“芸術世界”やユージェントシュティルを表しています。こちらは非常に親密な場面です。

(スライド)

コナシェーヴィチのもっとも有名な本の一つは *Pozhar* (火事) (OGIZ Molodaia gvardiia, 1923.) で、文章はマルシャークによるものです。コナシェーヴィチは、この本でも火との戦いをドラマチックかつ楽しい絵で語っており、映画フィルムのような連続した形で絵を見せています。

## テーマ

子どもたちは自分たちの住む世界の何を知ることができるのでしょうか。レニングラードの国立出版所の絵本は、主に就学前の子どもたちに焦点を当てており、そのテーマも家族、住んでいる家や通り、遊ぶゲームや勉強の仕方などといった子どもたちの生活に直結

したものでした。

(スライド)

パホーモフの *Leto* (道) (GIZ, 1927) やコナシェーヴィチの「我々の道」は、他の子どもや大人に対する行儀のよい行動の物語を書いています。そして、楽しく表現された道徳教育の一例であります。

(スライド)

西ヨーロッパの絵本のように、よく動物のテーマが使用されています。マルシャークは、動物学者のヴィタリー・ビアンキ (Vitalii Bianki) に、動物及びその行動について物語を書くよう奨励しました。これは、ビアンキの *Snežnaja kniga* (雪の本) (Lengiz, 1926) で、挿絵はニコライ・ティルサ (Nikolaj Tyrsa) です。

今までお見せした例の中でも、既に「技術」の重要性が明らかになっています。「技術」は、この間ずっと繰り返された主要なテーマでした。機械、交通、及び通信は、この国の産業化においては重要な要素であり、ここで見せている楽しいお話の他、ノンフィクション本にも書かれていました。

(スライド)

これは *Pochta* (郵便) (Raduga, 1927) というものです。これは、手紙の受取人である作家のボリス・ジトコフ (Boris Zitkov) を追って世界一周をするという物語です。ミハイル・ツェハノスキー (Mikhail Tskhanovskii) が挿絵を描き、文章はサムイル・マルシャークでした。これはパリからミ

ュンヘンに行くのですが、これがその郵便局の人です。

チチャーゴワ (Chichagova) 姉妹は構成主義を代表しており、工業生産に関する本を何冊か出版しています。これらはエル・リシツキーの幾何学的な形を強調する本のデザインの影響が表れた高度な技術的、芸術的表現方法を使っています。エンジンや食器のような日常に用いる道具が人間の労働と知性の産物として、進歩を表す図像となっています。これらは、こちらの展示会でも御覧いただけます。これらの本の中では、技術がより良い将来の基盤であることが、その内容だけではなく、描かれ方にも表れています。

(スライド)

この本は新聞作りの本 *Detjam o gazete* (新聞の子どもたち) (Gosizdat, 1926) です。情報を普及させるということ、そして新聞そのものも販売を広げるということが表現されています。この絵本は工業生産に関する絵本の一例です。これらは独立したジャンルとして、生産工程とは何かを教えます。もう一つの例はパンの生産工程を描いたものです。

(スライド)

これは、オリガ・デイネコ (Olga Deineko) とニコライ・トローシン (Nikolai Troshin) による *Chlebozavod No.3* (パン工場 No.3) (Gosudarstvennoe izd., 1930) です。

1917年以降の教育への取組は、個人及び大衆の文化領域全体に及びました。知識の一般的な基準を向上させることが重要なだけでは

なく、実践的な手作業能力も訓練されるべきと考えられていました。技術は、仕事に臨む適切な姿勢を求め、技術そのものが新しい人間を教育する優れた手段として見なされていました。新しい人間は進取の気性にあふれ、勤勉であるべき人物だとされました。自信ある姿で仕事へと闊歩して行く、ここでお見せしている電気工のように。子どもがまねるお手本として描かれています。

(スライド)

これは男の子に、それぞれに異なった職業を見せています。これには男の子が、将来自分が 17 歳になったら何をやるのだろうかと考えている絵が描かれています。そして、その可能性がある仕事というのは、よりよい近代社会を作るために描かれています。例えば、建築家、あるいはエンジンのボルトなどを作るエンジニア、機関士、医師などが見せられています。

(スライド)

次にお見せする 3 枚のスライドは、レニングラードではなくモスクワで出版された絵本です。レニングラードの絵本は就学前の児童の発育に焦点を当て、その子どもたちが想像豊かにして遊べる空間を提供していますが、モスクワの出版社は低学年の児童に焦点を当てました。ファンタジー、メルヘンや想像の世界には反対をして、明白なメッセージを込めた現実的な本を好みました。視点はより広く、大人の世界、外国での暮らし、政治といった内容が書かれていました。絵本は、子どもが国際的な団結と自国ソ連への愛国心を理解することを意図していました。

(スライド)

こちらの例 *Oktjabr'skie pesenki* (10 月の歌) (Gosudarstvennoe izd., 1927) は、子どもたちのソ連への愛国心を強化することを目的とした絵です。赤い星と国旗の表象を強調しています。そして、国際的な団結というのは、他の大陸からの人々も描くことによって現わされています。

(スライド)

アグニヤ・バルトー (Agnia Barto) は、その *Bratishki* (幼い兄弟たち) (OGIZ Molodaia gvardiia, 1929) という絵本の中で、絵本画家のエチェイストフ (Georgii Echeistov) と共に、子どもたちの国際感覚の理解を呼び起こすための物語を書いています。

田園生活のテーマは、1928 年の集団化の運動が始まった後、絵本の世界にも戻ってきました。この時には、田園生活に対するノスタルジアは全くなく、この絵に見られるような高度に機械化された農業の将来の展望が表されています。

(スライド)

アレクセイ・ラプチェフ (Alekssei Laptev)、ジナイダ・アレクサンドロバ (Zinaida Aleksandrova) の *Kolchoznaja vesna* (コルホーズの春) (Molodaia gvardiia, 1932) です。

1920 年代、モスクワの出版社は優れた絵本を出版していましたが、総合するとレニングラードの出版社のレベルには届きませんでした。モスクワで出版された絵本は、芸術的に

は優れていましたが、マルシャークやチュコフスキーなどの文章の文学的な質に匹敵する内容ではありませんでした。

御紹介したこれら全ての絵本は子ども用に作られました。しかし、大人向けの本と同じく真剣に作られました。絵本の作者と絵本の画家は、子どもを将来の大人として見て、子どもたちが世の中を自分のものにする手伝いをしたいと考えたのです。これらの絵本は子

どもたちの住む世界を説明し、自分たちはその中でどの位置にいるかを示してあげました。その示し方はテーマの数と同じように多数あります。1920年代のロシアの絵本はその時代の特異な現象でした。これらの本は家族や幼稚園の範囲を越え、子どもの直接の生活空間も越え、子どもたちのために都市や社会の扉を開け、近代の世界絵図を提供しました。

御清聴ありがとうございました。